
僕と彼女の「好き」の話

来々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と彼女の「好き」の話

【Z-ONE】

Z6308M

【作者名】

来々

【あらすじ】

僕の彼女、無表情で無口で、僕に今まで一度も「好き」って言ってくれない。彼女は本当に僕のこと好きなのかなあ。

私の彼氏、元気でおしゃべりで、私に何度も「好き」って言つてくれる。なのに、私はその思いに答えていない。

ありふれた、でもなんだか優しい気持ちになれる、そんな「好き」

僕の彼女は無表情だ。

もう付き合つて2年になるけれど、僕はまだ、彼女の笑顔も、泣き顔も、怒り顔も見た事がない。

僕の彼女は無口だ。

電話でも、デートでも、彼女から僕に話しかけて来る事はない。おまけにメールはいつも一行なんだ。

そんな彼女は、僕を好きと言つてくれた事もない。僕は何度も、彼女に愛を語つていてるのに、返事はいつもそつけない。

彼女は僕の事を、本当に好きなのかな？

ある晴れた休日。僕と彼女は、行きつけの喫茶店に来ていた。その喫茶店は、40歳くらいのおばさんが一人で経営してる。いつも行つても空いてるし、味だって特別に驚く事もない。強いていえばコーヒーが苦いくらい。でも内装とか、流れている音楽とに独特な雰囲気があって、それが僕達にはとても魅力的なんだ。

その喫茶店で、僕はいつもホットミルクとバターケツキーを注文する。

ホントならコーヒーが飲みたいけれど、僕は舌が子供みたいで、まだ苦いコーヒーは飲めないんだ。

でも彼女は大人だから、その苦いコーヒーを、少し顔を綻ばせながら美味しそうに飲む。

脚を組んで、ハードカバーの分厚い本を片手に、少しだけ微笑みながら、コーヒーを飲む彼女。その時の彼女は凄くクールで、その姿を見るのが、僕の一番好きな時間だ。

でもそれと同時に、その顔の綻びに、僕はいつも嫉妬させられる。僕がどんなに努力しても変えられない、彼女の氷のような表情を、たつた一杯のコーヒーが溶かしてしまいうのが許せないのだ。

そんな事が頭に浮かぶと、いつも考えてします。

彼女は、僕の事を本当に好きなのかな?

いつもなら、その疑問は心の深いところにしまっておく。もし、

彼女が望んだ答えをくれなかつたら。

怖くてとても聞けないんだ。でも、その日は違つた。自分でも驚くほど自然に、いつも思つていた疑問が口から出でてきた。

言つてすぐにしまつたと思つた。彼女に聞こえてなかつたとか、自分に都合の良いことばかり頭に浮かんだけれど、彼女にはしつかり聞こえていたようだ。

何だか驚いているような怒つているような、とにかく見たことがない表情をしている彼女。僕がその表情を読み取れずになると、彼女は少し乱暴に本を閉じ、コーヒーを一口飲んで、真つ直ぐに僕を見つめた。

「……その質問に答える意味はあるの?」

彼女がそう言つたとき、僕の心のどこかが、発破解体されたみたいに崩れてガラクタになつた気がした。

「……そう、なんだ。僕が君の事、……好きな、だけなんだ。……僕の事、好きじゃないんだ」

本当に爆発したかのよう、言葉と涙が溢れ出て止まらなかつた。彼女は、そんな僕を見て対応に困つてゐるようだつた。何度も言葉を言おうとしていたけれど、そのたびに僕の言葉がそれを遮つた。

「もう……いいから。今までホントにごめんね……」

そう言つて、レジに千円を置いてお店を飛び出した。

僕は走つた。そうしないといけないような気がした。息は切れ切れになるし、足だつて当然のよう痛みを発してゐる。ああ、何をやつてるんだろうな、僕は。

そう思つた瞬間、世界が真つ黒になつた。

私の彼氏は表情が「口 口 口」と変わる。

彼の笑顔、泣き顔、起こった表情でさえ、子供のように素直で、私はそんな彼の顔を見ているのが、何より好きだ。

私の彼氏はお喋りだ。

付き合って2年。電話でも、デートでも、彼の話す話題は未だに尽きることはない。その話に耳を傾けるのも、私の楽しみの一つ。そんな彼氏は、何度も私に愛を語ってくれる。幼いけれど、素直な言葉で、私を喜ばせてくれる。

でも彼の言葉を聞くたびに、私の心には少しだけ影が落ちる。どうして「私も好きよ」と言えないのだろう。私はこんなに彼が好きなのに、声に出せない。表情にも出せない。

だから、彼の表情まで無くなってしまったんだ。私のせいで。もう何日も好きって言つてくれない。表情にも出ない。瞳をずっと閉じたままだ。

私のせいで、私のせいで。

億劫に思いながら目を開けたら、目の前に彼女の顔があった。耳に入つてくるのはピッピッという機械音。鼻には病院独特のいやな匂いが感じられた。

「どうして、泣いてるの？」

僕は彼女に尋ねた。だつて、今まで見たこともないような表情をしていたから。

「いい？ 一度しか言わないから、よく聞きなさい」

彼女は僕をぎゅっと抱きしめて言った。声は震えていたけれど、

「私は、貴方の事が大好きよ」

しつかりと芯があつて、凜とした彼女の声だつた。

「私は恥ずかしがりだから、なかなか口に出せなくつて。貴方が好きつて言ってくれるたびに嬉しくて、私もよつて言えない自分が大嫌いだつた。」

彼女は僕をさらに強く抱きしめた。

「貴方が好きよ、だから、ねえ。もう、何処にも行かないでよ…」

僕もぎゅっとし返した。彼女は声を上げて泣いてる。僕だつて涙があふれ出た。

「僕も、大好きだよ」

嬉しくつて、涙が止まらなかつたんだ。

彼女は相変わらず無表情だ。
あの時と同じ様に喫茶店に座つて、ハードカバーの本を読んで。でも変わつた事もいっぱいある。
例えば、おばちゃんの白髪が増えたこととか、僕がコーヒーを飲めるようになったこととか、彼女と僕が同じ姓になつたこととか、

「ねえ、お父さん？お母さんが読んでる」本、難しくってわから
ない」

喫茶店に来る人数が、一人増えたこととか、ね。

(後書き)

はじめましてとお久しぶりです。来々と申します。
今回は空気感を大事にしてみました。ものすごく久しぶりの投稿
でしたし、テーマはありきたりかも知れませんが、ちょっとだけ暖
かい気持ちになって頂けたら幸いです。
では、次回こそがんばらせて頂きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6308m/>

僕と彼女の「好き」の話

2010年10月12日07時21分発行